小村雪岱

その美しき面影

大正から昭和にかけて、さまざまな分野で活躍した美術家・小村雪岱（せったい）。
今でもその細やかな画風が人気の雪岱、実はここ、川越出身。
今回は、雪岱が手がけた美しく物語る装丁と挿絵の世界を特集します。

文＝櫻井理恵　写真＝熊谷昭典　イラスト＝上坂じゅりこ

小村雪岱の生涯

小村雪岱は明治二十年（一八八七）に、川越町郭町（現川越市郭町）に生まれた。本名は泰助。なお小村家は川越藩士の家柄であった。両親と幼くして離別し、小学校を卒業したのちには神田神保町の叔母のもとに身を寄せた。のちに日本橋に住む書家、安並賢輔の書生をし、のちに養子縁組をして安並性となった。絵を描くことに興味を持ち、明治三十七年（一九〇四）に東京美術学校日本画科選科で下村観山に師事して、古典絵画の模写、写生など、画技の基礎教育を受けた。

美術学校卒業後、雪岱は木版多色摺図版の版下絵の制作をするにあたり、仏画や絵巻、浮世絵を模写して伝統美に接することで、控えめな色彩に対して見るものを楽しませる構図や風俗考証など豊富な知識と技術を得た。また画号「雪岱」を授けたのは、文豪の泉鏡花。鏡花は雪岱の人生に大きな影響を与えた作家でもある。大正三年（一九一四）、泉鏡花の『日本橋』の装丁を手掛け、一躍有名になっていった。以後、雪岱が生涯に手がけた本の装丁は二百冊以上に及ぶ。また大正十一年（一九二二）に手がけた里見弴の『多情佛心』をはじめとし、新聞や雑誌などに多くの挿絵を描いた。また古典に詳しかった雪岱には、芝居の舞台装置制作の声もかかり、大正十三年（一九二四）の『忠直卿行状記』から二百作以上の芝居を担当した。

雪岱が手がける装丁や挿絵は線と面で構成された平面的な表現で、木版摺りや機械の印刷方法に馴染みやすく、そういった技をうまく使いこなしながら一目で雪岱が描いたとわかる特徴が創り出されている。こうした雪岱の画業から育まれたスタイルは「雪岱調」と呼ばれ、日本の伝統的な美意識と表現の型をベースとしながらも繊細かつ大胆な作風が、人々を魅了した。また三十一歳の時には資生堂意匠部（のちの宣伝部）に入社し、資生堂デザインの基礎作りにも携わっていた。

さまざまな分野で評価された雪岱は、多忙な毎日を送っていたが、昭和十五年（一九四〇）、連載中であった「西郷隆盛」の挿絵を仕上げ、打ち合わせから帰宅したのち、脳溢血で倒れ、同年十月十七日に五十三歳でこの世を去った。

泉鏡花と小村雪岱

雪岱にとって、泉鏡花は運命の人である。「雪岱」の画号を受けたばかりでなく、装幀家、挿絵画家としての雪岱があるのは、鏡花あってこそと言える。雪岱は鏡花より十四歳年下で、美

小村雪岱　略年譜

明治20年	1887	３月24日、川越町郭町に父小村繁門、母もんの長男として生まれる。本名泰助。
明治23年	1890	３歳。父が日本鉄道株式会社勤務のため、下谷区金杉上町へ転居。
明治24年	1891	４歳。父の病気療養のため川越へ戻るが、父は死去。
明治25年	1892	５歳。父の実弟である小村萬吉に養育される。川越小学校入学。
明治33年	1900	13歳。叔父の奉職により転校した坂戸小学校高等科を卒業。
明治34年	1901	14歳。父の実妹市川美保方に寄宿。神田区神保町に住む。
明治35年	1902	15歳。書家の安並賢輔方の学僕となり、日本橋檜物町に住む。
明治36年	1903	16歳。画家を目指し、荒木寛畝塾に入門。
明治37年	1904	17歳。東京美術学校（現東京藝術大学）日本画科選科に入学。40年から下村観山教室で学ぶ。
明治38年	1905	18歳。安並家と養子縁組する。
明治41年	1908	21歳。東京美術学校卒業。卒業制作《春昼》。
明治42年	1909	22歳。泉鏡花より「雪岱」号を授かる。
明治43年	1910	23歳。美術雑誌の国華社に入社。古画の模写に従事する。
大正3年	1914	27歳。泉鏡花『日本橋』の装幀が好評を博す。
大正7年	1918	31歳。資生堂意匠部に入社。
大正8年	1919	32歳。泉鏡花の世話で田村八重と結婚。泉鏡花を囲む九九九会が十月に発足。
大正11年	1922	35歳。里見弴作「多情佛心」（時事新報）で初めて新聞連載挿絵を手がける。
大正12年	1923	36歳。資生堂意匠部にて、矢部季とともに現行の資生堂書体に近い宋朝風書体を考案。十二月に資生堂を退社。
大正13年	1924	37歳。浅草・公園劇場『忠直卿行状記』で初めて舞台装置を手がける。
大正15年	1926	39歳。新橋演舞場「安土の春」の舞台装置などを担当。
昭和3年	1928	41歳。歌舞伎座「幻椀久」の舞台装置などを担当。
昭和7年	1932	45歳。邦枝完二作「江戸役者」（東京日日新聞、大阪毎日新聞）の挿絵を担当。
昭和8年	1933	46歳。邦枝完二作「おせん」（東京朝日新聞、大阪朝日新聞）の挿絵を担当、人気を不動のものとする。
昭和9年	1934	47歳。邦枝完二作「お傳地獄」（読売新聞）の挿絵を担当。
昭和14年	1939	52歳。小村雪岱・田坂柏雲二人展（伊勢丹）に出品。
昭和15年	1940	53歳。十月一五日夜に脳溢血で倒れ、十七日に麹町平河町の自宅にて死去。世田谷区烏山妙高寺に葬られる。

術学校在学中に、幻想と妖美の文豪である鏡花の作品を知った。また卒業制作でも鏡花の作品を主題にしている。その後、明治四十二年頃に知人宅で偶然鏡花に出会ったことから、二人の交流が始まった。雪岱が初めて手がけた『日本橋』の装幀も泉鏡花の書き下ろしの単行本で、当時無名だった雪岱を鏡花が抜擢した。日本橋川を行き交う船と白壁が並ぶ蔵に蝶、見返しには四季の風情を描いた雪岱は、小説の舞台である日本橋界隈は青春時代に過ごした地でもあった。この仕事が評判となり、多くの鏡花の著作の装幀を手がけ、その美しい意匠は今でも高く評価されている。鏡花との交流により、雪岱の世界も広がっていった。挿絵の仕事を始めたのも、鏡花を慕う九九九会のメンバーでもあった里見弴からの依頼がきっかけであった。鏡花と雪岱は多くの共作を残し、鏡花亡き後は彼の墓も雪岱が設計したが、その一年後、雪岱もこの世を去った。

雪岱が描いた女たち

雪岱は昭和八年（一九三三年）九月から十二月まで朝日新聞で連載されていた邦枝完二の「おせん」で挿絵を担当していた。舞台は江戸時代。谷中にある茶屋の看板娘で江戸一番の美人と言われているおせんと幼馴染で人気役者となった瀬川菊之丞との悲恋を描いた小説である。主人公の笠森おせんは鈴木春信が錦絵を描き評判になった実在の美人。雪岱はこの主人公をほっそりと清潔感がある娘として描き、「昭和の春信」として絶賛された。おせんの姿のデフォルメはもちろん、激しく降る雨を表した直線、人混みを表現した重なり合う傘の表現、古典絵画に見られる吹抜屋台、俯瞰など、その作風が挿絵画家としての地位を確立させた。

また邦枝完二と雪岱が組んだ新聞連載小説の三作目「お傳地獄」は、昭和九年（一九四二）九月から翌年の五月まで読売新聞で連載された。明治期に強盗の罪で斬首された高橋傳の生涯をモチーフにしており、雪岱はおせんとは違った魔性の女を描いた。和洋が混在する明治の情景が織り交ぜられ、雪岱のすっきりした線画が表現する明快な構成が新時代を余すところなく表現している。また黒で塗りつぶされた表現は、風景だけでなくお傳の心の闇を効果的に表し、強烈な印象を残した。連載が終了すると、雪岱が装幀を手がけた単行本も発売され、邦枝完二との共作が続いた。

雪岱の肉筆画

東京美術学校で正当な日本が教育を受けた雪岱は、いつの間にか装幀、挿絵、舞台美術が本業となっていった。いずれの分野でも評価され、晩年まで多忙だった雪岱。しかし点数は少ないものの、肉筆画も残しており、ほとんどが依頼されて描いたものだ。「青柳」「落葉」「雪の朝」は、資生堂関係者が所蔵していた。装幀や挿絵に通じる雪岱調は、この肉筆画にも表れている。また美人画でも流れるような筆運び、着物の柄や女性の髪の描き方は、肉筆画だからこそ雪岱の色彩感覚や技術を感じることができる。雪岱は仏像が好きで、晩年は仏画を描いていたいと話していたというが、その願いは叶わず、多忙のうちにこの世を去った。

デザイナーとしての小村雪岱

装幀家として活躍した大正から昭和初期は、出版社が競い合い、こだわった美しい装幀の本を世に送り出した時代である。人気だった雪岱の名前を冠して発売すれば本の価値が上がり、雪岱は晩年まで多忙な日々を送っていた。

雪岱の意匠の特徴は、絵画的なものと図案的なものの二つが挙げられる。物語の舞台を装幀で表し、読者をその世界に引き込む。本を立体的に、あるいは平面的に考え工夫を凝らされた意匠は、舞台装置の考案や美術考証を任されるほどの才能を持つ雪岱ならではの。『銀砂子』の著者である鏑木清方は雪岱について、「素材を前にして何を描かうかと考へるより、どんな意匠でこの素材の面白味を表はして見ようかと、その工夫に一ばん頭脳を使たらうと想像される」（「序」『小村雪岱』高見澤木版社、昭和十七年）と語っている。現代とは全く違ってすべて人の手によって多くの工程を経て出来上がった本が、この時代においていかに多くの人々を楽しませできたか。雪岱が心を砕き、作者と共に創り上げていった意匠は、今の私たちにも深く響くものがある。

川越の地が育んだ文化人

川越で幼少期を過ごした雪岱だが、実際の画業は引っ越した東京での活動が中心であった。「川越は比較的、出身であったり在住していた画家が多い地域です。江戸から続く商業のまちであることからも、そういった芸術に明るい人々が流入してきた背景があると考えられます」と話すのは川越市立美術館の学芸員、折井貴恵氏。裕福な商家や武家では習い事として絵画に嗜むことも多かったことから、文化の土壌が育まれてきた。控えめな中に卓越した技術を駆使し、深い思慮を表現しながら美しい芸術を織り上げていった小村雪岱。彼が暮らしたこの川越の地で、私たちが芸術という側面からもう一度故郷を見つめ直し、連綿と続く文化の流れに触れる時、これから作り上げるべき川越の未来に、また新たな展望が生まれてくるのではないだろうか。

参考文献
『小村雪岱―物語る意匠』大越久子
埼玉県近代美術館、東京美術発行
二〇一四年
『小村雪岱―「雪岱調」のできるまで』
（展覧会図録）川越市立美術館
二〇一八年
『小村雪岱』高見澤木版社、一九四二年
『川越市百周年記念誌』
川越市、二〇二二年

協力
上野英二
川越市立美術館

おせん

特別寄稿

グラフィックデザイナー
山口信博

朝、目を覚ますと家の外の音が普段とちがっていることに気がついた。

今から七十余年前の昭和二十九年の冬のことである。その日は、前日の夜半から雪が降り始め、関東地方にはめずらしい大雪となった。小学校に入学する前だったので、私は五才か六才だったと思う。

家の外に出て見ると、もうすでに雪は三十センチ近く積もり、どんよりとした灰色の空から、とめどなく雪が生まれ出てくるように降っていた。そこは、前日の見なれた風景とはうってかわって雪自身の音しかしない。生家が牧場だったので、開けた場所に点在する木々にも牛舎にもサイレージにも雪は降りつづけ、木の幹や牛舎の木壁やサイレージのレンガ積みの円筒が白い画面に描かれた垂直な線や面や形だけになっていた。

私は息をのみ感動すると同時にこの白い清浄な世界を汚しては、いけないと子供ごころに思った。この世界にふみ込んではいけないし、自分の足跡もつけてもいけないと思った。絶対という言葉など知るよしもなかったが、今から思うと「絶対」ということに近い感覚を持ったような気がする。この日のことは、私のデザイナーとしての原点となっているにちがいないと思っている。

一方で、子供なのでむくむくと悪戯心も出てきて、わざと足跡をつけてみたり、悪ふざけで雪の中に倒れ込んだりしてひとしきり一人遊びをした。

その後の事は、思い出すことができないが、その時間と空間だけがポッカリと浮いているように記憶の中に残っている。

そんな記憶が関係しているにちがいないが、小村雪岱の『雪の朝』を骨董屋で、三十年ほど前に大枚をはたいて入手、愛蔵している。当時は、小村雪岱という名前も知らなかったし「雪岱」を「せったい」と読むことも知らなかった。

『雪の朝』は、雪の日の風景で、室内に光が灯もり家全体が行燈のようである。描かれてはいないが分厚くたれこめた雲も想像される。建具も含め日本家屋の持つ直線的な特徴が簡素に描かれ、それとは対称的な雪のやわらかな有機的な曲線が美しい。

国宝になっている三徳山三佛寺投入堂をおもわせる日本家屋を含め、雪岱が空想で作りあげた美的な世界である。後に、自分の記憶と雪岱の絵があいまってこんな一句が生まれた。

おとのなきあしたへ雪とおとずれむ　方眼子

小村雪岱「雪の朝」（木版画）　個人蔵　雪岱は川越出身の日本画家である。